【書　　評】

バスケットボール学入門

（内山治樹・小谷究編著，流通経済大学出版会，2017年，239頁，1500円＋税）

古澤栄一
Eiichi Furusawa

スポーツ熱は2020年が近づくにつれ，高まっている．言わずと知れた東京オリンピック・パラリンピックを間近に控え，各競技でアスリートがそれぞれのフィールドであるアジア大会や世界選手権等で活躍する場面が増えているからだ．メディアも大きく取り上げ，スポーツ界が自然と活気づいている．その反面，過去の暴力問題やパワハラ事件が取り質され，良くも悪しくも社会の関心は高くなっている．

そういう中，さらに現場が華やぐように学問の世界へ待望の書物が刊行された．それがこの『バスケットボール学入門』である．バスケットボールをプレイ，指導，観戦するだけでなく，学問として研究を志す若き研究者に，研究への導入ないし手がかりとして問いかける良書だ．また，各専門領域で既に活躍している熟練した研究者にとっても水平思考的なアプローチをかけるには格好の題材である．

さて，専門領域というと一般社団法人日本体育学会では15の分野に分かれるが，ここではユニークな16の領域を17人の著者により懇切，丁寧に仕上げている．それぞれに深堀りされており，ついつい引きずり込まれてしまう．何故かと言うと，そこにはスキなし底なし解説が網羅され，常に「新しい発見」があるからだ．

例えば，第１章「日本におけるバスケットボール研究の歴史」では，一般に Naismith が考案のバスケットボールを日本に伝えたのは大森兵蔵であり1908年と知られている．けれども，その前1894年，成瀬仁蔵によって女子競技が紹介されたとのこと．なんと，驚きである．こう考えると成瀬による教材研究が早いがために，女子の競技レベルが男子に優るのかと推察してしまうのは私ばかりだろうか．

また，第８章「社会学」では，その方法論の中で整理された調査方法やサンプリング方法が詳細に描かれている．若手にとっては有り難い．確かに一見難しそうな専門用語もあるが，「鉱山の鉱夫のように」あるいは「旅行者のように」とかユニークな例えで表現しているので，関心がそそられ理解が深まる．そして，いつしかスノーボール・サンプリングにはまってしまうだろう．

加えて，もう一つ紹介しておこう．第11章「哲学」である．自然科学が当該研究の結論を導き出すために「仮設」を立て，それを「検証」することによって導き出すわけだが，それを哲学的研究に当てはめた場合，どうなるのだろう．実験による検証という手続きを採ることが出来ず，あくまで「論理的に」成し遂げられねばならず，「客観性」を担保するために克服しなければならない学問的課題があるわけだ．そこには，バスケットボールのあらゆるチーム戦術を支えて深層に潜む仕組みを３つの要因「時間」「空間」「動的秩序」として捉え，それを現実的なオフェンス，ディフェンスの姿に変え，説いている．はたしてそれは何だろう．読み解くと，きっと，あなたはいつしか己がカントと錯覚して已まない．

ただただ，最後に忠告しておきたいことは，あまりに各章の内容が濃いため蟻地獄のように飲み込まれ，抜け出すことが困難な危険性があるからだ．でも，ご安心下され．多くの例示や文献があなたの助けとなり，改めて自分が新たなパイオニアであることに気づくはずだ．